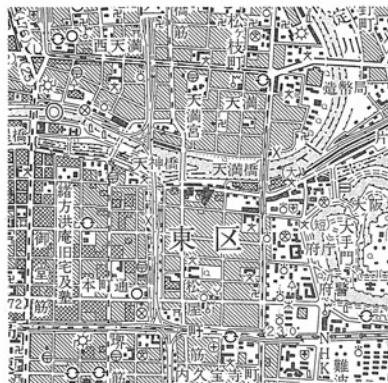


大阪・大坂城跡(1)



(大阪東北部)

調査地は一九三一年に復興された徳川氏大坂城天守閣の北西約一kmに位置しており、北は大川に臨み、東隣には式内社坐摩神社の御

旅所がある。この地域は古文書によれば、鎌倉時代に渡辺家の本拠地になつていたほか、室町時代の石山本

願寺の末寺と思われる淨土寺の推定地の一つである。

また、近世に至つては豊臣氏大坂城惣構内の武家屋敷地になり、徳川氏大坂城の

再築以降は城外となつて大名屋敷地へと移行している。

今回の調査では、現地表面下約一・五mで検出された徳川氏大坂城の再築に伴う整地層の直下から元和元年(一六一五)大坂夏の陣で焼失した武家屋敷の一部とみられる塀の石垣や門、礎石建物などが検出されたほか、武家屋敷の下層から豊臣時代の礎石建物や木簡を伴つた土壌などが重複して認められた。

木簡が出土した遺構は長径一・四mで、短径が約一mのヨミ穴と考えられる土壙(SK六〇七)及び礎石建物周辺の浅いくぼみ(SX六〇二)である。ともに、遺構の埋土は黒色砂礫混りシルトで、豊臣時代に属する各種の遺物(備前・美濃・瀬戸・中国製陶磁器・木簡・漆塗り椀・箸・盤・樽・桶・下駄・加工木片・宋錢・鐵鎌・鐵釘・鐵火箸・錐・小柄)が多量に出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「▽大かしら□□」

・「▽卅六入」

173×26×4.5

(2) 「▽□□」

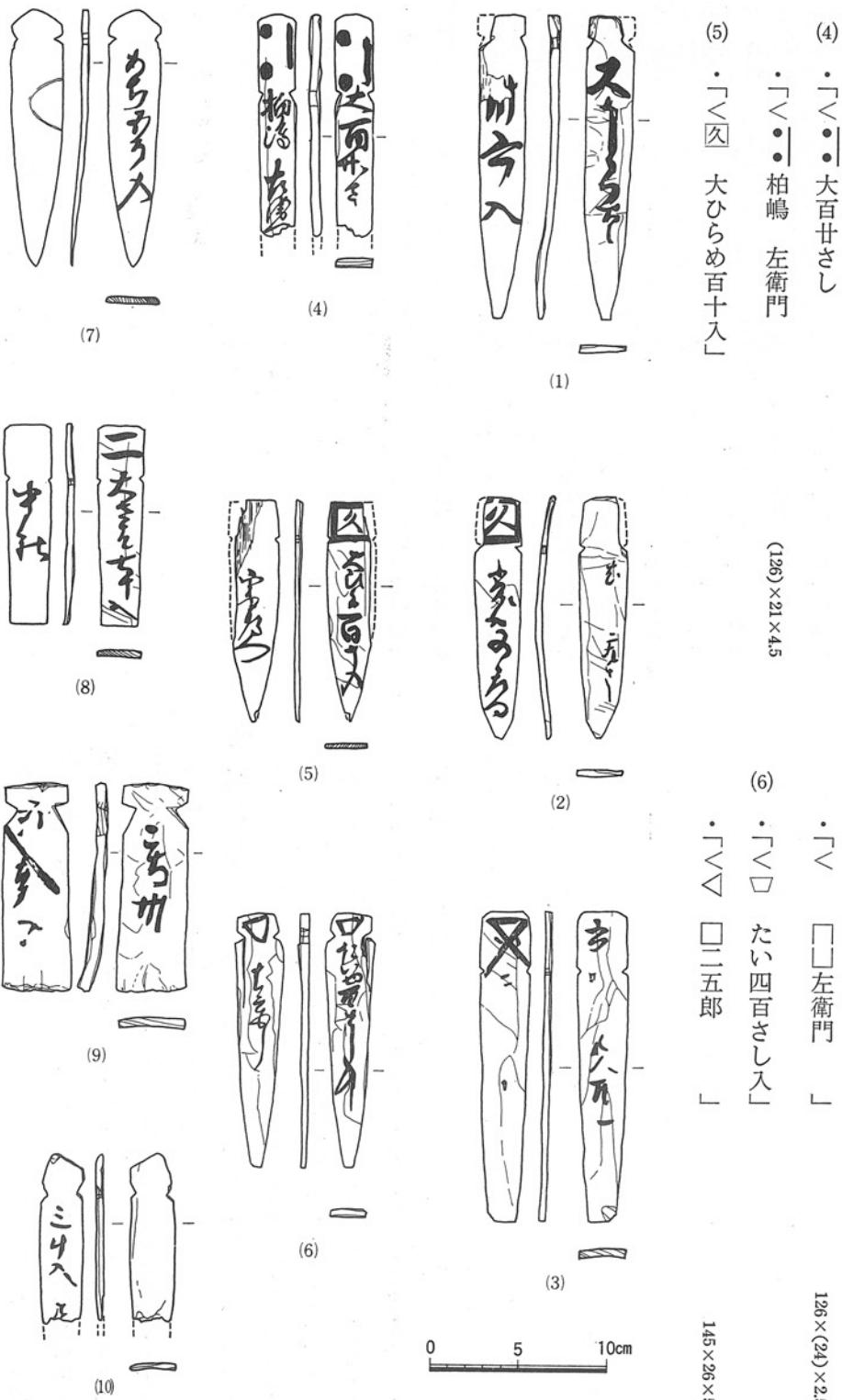
・「▽久□□又左衛門尉」

138×25.5×3

(3) 「▽□□」

・「▽久□□」

178×28×4.5



(7) 「▽あち五百入」

147×29×2.5

(8) 「▽一 大さは七十入」

114×25×4

・「▽ □新」

(9) 「▽いわ卅」

・「▽□□」

(10) 「▽二〇十入 □×」

(96)×24×3.5

木簡の形態は長方形を呈し、材の左右に切り込みを入れて頭部を平らにするものと、尖らせぎみに調整するものとがある。また、下端部については尖らせぎみのものや平らなものなどがあるが、量的には前者が過半数を占めている。

木簡の代表的な例は図示したように、表面に魚名（あち・たい・かしら・さは・こち・ひらめ）及び数量（三十入・三十六入・七十入・百十入・五百入・三十・百二十さし・四百さし入）を、裏面には「屋号」様の印と人名（□二五郎・又左衛門尉・柏嶋左衛門）を墨書きしている。なお、屋号とみられる墨書きは一般に木簡の頭部に書かれているが、表裏に記されたものもあり、記入の位置については頭部に記す以外に特にきまりはなかったようである。また、今回判明した魚名は紹介しなかった「さわら」一点を含めて一六点あり、全て海魚であった。

当地に運ばれてきた魚に伴う荷札木簡と考えられ、当時の食生活や商業活動の実態を知るための貴重な資料と言えよう。

今回出土した三七点の木簡は大坂夏の陣で焼失した武家屋敷の下層から出土しており、伴出遺物から天正八年（一五八〇）～一年頃に埋まつたものと考えられる。一方、昨年出土した道修町一丁目の海魚の荷札木簡は、大坂夏の陣（一六一五）の整地層の下面で出土しており慶長期（一五九六～一六一五）のものと考えられる。このことから、今回出土した木簡は慶長期に先行する木簡の形態を示すものとして注目される。木簡の整理・釈読にあたつては鳥居信子（大阪市文化財協会）の協力を得た。

（田中清美）

以上の木簡は、その形態や墨書きの内容からみて、各地から大坂の